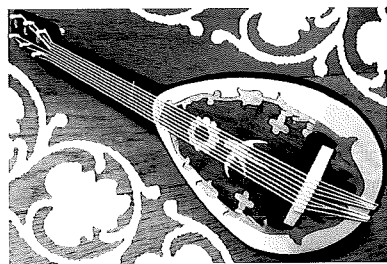


Mandolin & Guitar Ensemble Bel Cuore

ベル・クオーレ

マンドリンコンサート No.37



日時／2019年5月11日(土) 開演 PM2:00(開場 PM1:30)

場所／浜離宮朝日ホール

主催 ベル・クオーレ



ご挨拶

本日は皆様ご多忙の中我々「ベル・クオーレ」の定期演奏会にお越しいただき、ありがとうございます。37回目の演奏会を迎えることができましたことは、我々の音楽活動を暖かく見守り、支援いただきました皆様のお蔭と団員一同感謝しています。

楽団創設時より、国土潤一、小出雄聖、両指揮者による指導の下、音楽の深さや難しさを感じながらも、団員は音楽に対する情熱を切らさず、演奏活動を続けております。

今回も、マンドリン・ギターの響きとの相性の良い浜離宮朝日ホールで演奏できることに、団員一同喜びを感じております。

さて、百数十年前、マンドリンとギターの合奏が欧州イタリアで盛んになりました。イタリアにおいてマンドリン音楽、合奏の発展の礎は、ヴィナッチャによるマンドリンの改良、教則本の出版、マルゲリータ皇后の擁護、そして1870年ナポリでの博覧会における大合奏をあげることができ、流行の契機となりました。こういったマンドリンの教則本や製作家の出現、そして、イタリア各地で刊行された音楽誌が作曲コンクールを行い、数多くの作曲家を育み、マンドリン合奏曲が生まれました。音楽誌の代表格には、イル・プレットロ誌“*Il Plettro*”、イル・マンドリーノ誌“*Il Mandolino*”などがあります。このような諸条件の好循環が続き、第2次世界大戦までの時代にいわゆるイタリア・マンドリンオリジナル曲が生まれました。また、欧州のプレクトラム音楽事情を日本に紹介、啓蒙した多くの先人達がいきました。

中野二郎氏(1902-2000)はその一人です。氏は愛知県出身。マンドリン・ギターを独学で習得しました。戦後に、NHK名古屋放送管弦楽団の指揮者を長く務めるかたわら、マンドリンとギターの指導に情熱を傾け、楽譜の収集をしました。才能は作曲で開花し、マンドリン合奏曲・マンドリン独奏曲・ギター独奏曲を作曲。『バガニーニの主題による30の変奏曲』は1954年のイタリア国際ギター作曲コンクールに入賞しました。また『一茶さん』などの童謡作曲家としても知られています。そして、『イタリアマンドリン100曲選』、『マンドリン古典合奏曲集』などを出版しました。

現在、中野氏の収集資料は同志社大学付属の図書館に保存されています。我々のようなマンドリン合奏愛好家に貴重な楽譜を残してくれました。

今回のプログラムのテーマは言うなれば“マンドリン合奏の温故知新”です。

これまで、クラシック曲の編曲ものを多く取り上げてきましたが、マンドリン・オリジナル曲も西洋音楽の一つとして捉えて、中野二郎氏の譜を使って、従来にとらわれない発想で曲想を練り、合奏団の新たなページを作りたいと試行錯誤を続けてまいりました。

お集まりいただきました皆様方に深く感謝申し上げるとともに、これからも良質の音楽をお届けできるように精進してまいります。最後までお付き合いいただきますよう、よろしく願いいたします。

ベル・クオーレ団員一同

ベル・クオーレでは演奏メンバーの募集を行なっております。
マンドリン合奏への参加をご希望の方は、井上(03-3712-3819)
または presentazione-bel@freeml.comまでご連絡下さい。

プログラム

G線上のアリア……………J.S.Bach/G.Mahler
編曲／佐藤 洋志

夜の歌……………E.Elgar
編曲／佐藤 洋志

朝の歌……………E.Elgar
編曲／佐藤 洋志

田園組曲……………J.Sibelius
編曲／佐藤 洋志
I. Pièce caractéristique
II. Mélodie élégiaque
III. Danse

タイスの瞑想曲……………J.Massenet
編曲／佐藤 洋志

メリー・ウイドウのワルツ……………F.Lehár
編曲／佐藤 洋志

——— 休 憩 ———

マンドリンについての討議……………C.A.Bracco
(通常題名:マンドリンの群れ)

夏の庭……………P.Silvestri

黄昏前奏曲……………D.Berruti

メリアの平原にて……………G.Manente
整曲／中野 二郎

G線上のアリア

J.S.Bach/G.Mahler 編曲/佐藤 洋志

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685～1750)は、バロック時代を代表する作曲家であり、「ブランデンブルグ協奏曲」、「平均律クラヴィーア曲集」、「マタイ受難曲」、オルガン曲「トッカータとフーガニ短調」など、数多くの名曲で知られています。「アリア」のある「管弦楽組曲第3番」は、作曲の経緯がはっきりしないところがありますが、ライブツィヒにおけるコレギウム・ムジクムの公演のために書かれたものであろうと考えられています。

後になって、後期ロマン派の作曲家グスタフ・マーラー(1860～1911)は、1909年にバッハ「管弦楽組曲」の第2番と第3番から自由に曲を抜粋、再構成しました。

第3番から選ばれた「アリア」は、原曲と同一の弦3部と通奏低音の構成ですが、奏法や表現記号などが詳細に加えられています。

なお、通称である「G線上のアリア」とは、ヴァイオリニストのアウグスト・ウィルヘルミがピアノ伴奏付きのヴァイオリン独奏のために編曲した際、二長調からハ長調に移調しており、ヴァイオリンの4本ある弦の内の最低限の弦(G線)のみで演奏できることに由来します。

本日演奏する編曲ではマーラー編曲版を基準とし、弦3部をマンドリン・マンドラが担当し、ギター・チェロ・コントラバスが通奏低音を担当します。

夜の歌 朝の歌

E.Elgar 編曲/佐藤 洋志

イギリスの近代音楽を代表する作曲家であるエルガー(1857～1934)は、行進曲「威風堂々」、交響曲、チェロ協奏曲等、時に国威発揚的であり、都会的で洗練されたイメージを持った曲が有名な一方で、彼が生まれ育ったイングランド中部ウスターの豊かな自然に触発されて作曲された「愛の挨拶」「序奏とアレグロ」「エニグマ変奏曲」等の作品も良く知られています。ある意味、その二面性が特徴であるとも言えます。

ここではいずれも後者に当たる「夜の歌」は1897年に、「朝の歌」は1899年にピアノとヴァイオリンによる初版が出版されていますが、作曲年代はともに1890年頃と言われており、エルガーの初期の作品と言えます。また「夜の歌」「朝の歌」ともに当初から連作として意識していたとされています。管弦楽編曲版は「夜の歌」が1899年に、「朝の歌」は1901年に出版され、ともに1901年に管弦楽で初演が行われています。

「夜の歌」は落ち着いた和音の伴奏に乗り、息の長い旋律が特徴となっています。「朝の歌」は4小節の導入に続き、シンコペーションのリズムの上に愛らしい旋律が奏でられます。

田園組曲

J.Sibelius 編曲/佐藤洋志

ジャン・シベリウス(1865～1957)はフィンランドを代表する作曲家で、7つの交響曲やヴァイオリン協奏曲、「フィンランディア」「トゥオネラの白鳥」「タピオラ」などの交響詩等、数多くの傑作を残しています。

この「田園組曲」は1922年に作曲されています。最後の傑作と言われている「交響曲第7番」「タピオラ」に近い時期であり、作曲としては晩年の作品ということになります。

既に「交響曲第2番」などで作曲家として著名だったため意外に思われますが、実はこの時期のシベリウスは経済的に苦しく、生活のためにこの曲を作曲したとも言われています。

原曲は弦楽による3楽章からなり、清楚な響きと独特なメロディは、簡明ながらもシベリウスの

特徴を示していると言えます。シベリウス自身、「これらしくて良い」との評価を日記に記していたと言われています。

タイスの瞑想曲

J.Massenet 編曲／佐藤洋志

ジュール・マスネ(1842～1912)はフランスの作曲家で、「マノン」などのオペラの他、管弦楽組曲「絵のような風景」などが知られています。

「タイスの瞑想曲」は1894年にパリで初演されたオペラ「タイス」のなかで最も良く知られた曲で、ヴァイオリンと管弦楽のための間奏曲であり、第2幕第1場と第2場の間に演奏されます。これは単独でもよく演奏され、他の楽器のための編曲も多くあります。

「タイス」はビザンチン帝国統治下のエジプトが舞台で、修道僧アタナエルがアレクサンドリアの高級娼婦であるタイスをキリスト教に改宗させようとし、豪奢で享乐的な生活から離れ、神を通じた救いを見出すように彼女を説得します。「タイスの瞑想曲」は、その出会いの後のタイスの熟慮の間に演奏される曲です。

弦楽器の和音に支えられたギター(原曲ではハーブ)の分散和音に乗って、滑らかでロマンに満ちた美しい旋律がマンドリンのソロ(原曲ではヴァイオリン)によって演奏されます。中間部へ入ると、タイスの心の動きを示すかのような旋律が演奏されます。その後再び冒頭の旋律に戻り、マンドリンのソロはオーケストラと一緒に優雅なコーダに入り、甘美に静かに終わります。

メリー・ウイドウのワルツ

F.Lehár 編曲／佐藤洋志

フランツ・レハール(1870～1948)はオーストリア＝ハンガリー帝国に生まれた作曲家で、オーストリア、ドイツを中心にオペレッタの作曲家として活躍しました。1905年にオペレッタ「メリー・ウイドウ(陽気な未亡人)」で一躍人気作曲家となりました。かのヒトラーもこの作品を大変気に入り、レハール夫人がユダヤ人であるにも関わらずナチスが庇護したほどです。

このオペレッタは、「ヴィリアの歌」やフレンチ・カンカンの挿入曲「天国と地獄」が有名です。

本日演奏するのは、劇中の様々な場面のワルツやアリアを組み合わせた「Ballsirenen／メリー・ウイドウのワルツ」です。本編は老銀行家と結婚した末に莫大な遺産を引き継いだ若き未亡人ハンナと、かつての恋人ダニロ伯爵による、素直になれない二人の恋の物語を描いたもので、「メリー・ウイドウのワルツ」はそれぞれの場面を彷彿とさせる旋律に彩られています。

マンドリンについての討議 (通常題名:マンドリンの群れ) C.A.Bracco

作曲者ブラッコは、生年について明確ではありませんが、19世紀中頃北イタリアに生まれ、1903年に亡くなりました。彼はマンドリニストであり、ヴァイオリニストであり、指揮者でもありました。ジェノヴァのマンドリン・ギター合奏団“Club Musicale Genovese”を指揮していた時、本曲は作曲されました。彼の名前を一躍有名にした傑作です。

1902年トリノの“イル・マンドリーノ”誌主催の第4回作曲コンクールにて金牌を獲得、同年6月同誌によって出版されました。

この原譜の表紙には“ジェノバ音楽クラブのマンドリニストとギタリストに贈る”と書かれています。1909年には、フランスで催された国際競演会でもっとも優れた作品として推薦されたことにより、欧州各国のマンドリンオーケストラによって演奏され、一層その価値を再認識されました。

夏の庭

P.Silvestri

作曲家シルベストリは1871年イタリアに生まれ、音楽学校に学んだ後、「チルコロ・マンダリニスティカ・モデネゼ」を創設し、その指揮者となりました。1910年前後にボローニャで創刊されたマンダリン音楽研究誌「イル・コンチェルト」の主幹になって、マンダリン音楽界を啓蒙するとともに数多くの作品を残しました。本曲は、1941年にミラノで刊行されたイル・プレットロ誌の作曲コンクールで3位を獲得しています。

黄昏前奏曲

D.Berruti

作曲家ベルuttiはイタリアのミラノとトリノの中間にある都市カサーレに生まれ、同地で音楽教育を受けました。

弦楽合奏団、マンダリン合奏団の指揮者および作曲家として活躍しました。

1930年代のイタリアにおいてマンネリズムにおちいりかけていた斯界に新風を吹き込み、新しいあり方を示したことは彼の偉大な功績と言えます。

1947年8月22日、カサーレのセント・スピリット病院で亡くなりました。Dinoは通称でGiovanniが本名。

代表作としては、「モスコウの真昼」(1930年、イル・プレットロ誌主催作曲コンクール1等受賞)「ハンガリアの黄昏」(1936年第7回作曲コンクール1等受賞)「幻想的セレナータ」「東洋の神秘」などがあります。

「黄昏」は彼の作品の中では小品に属しますが、構成のたくみさ、それにベルutti独特のハーモニーは、弾く人、聴く人を魅了します。

非常に神経質な人柄で、2、3年おきに発作のようなものが起きていたと言われ、1947年にその治療のため簡単な手術をすることになっていましたが、彼はこの手術に極度の絶望感を覚えて手術の直前に自らの命を絶ってしまいました。このような彼の性格は作品にも影響し、繊細かつ暗いものが多く、情緒に富んだ作風は、彼がいかに感受性の豊かな作曲家であったかを物語っています。

メリアの平原にて

G.Manente 整曲／中野 二郎

作曲家G. マネンテは19世紀半ば過ぎにイタリア北部サンニオに音楽家を父として生まれました。王立陸軍学校付属の音楽学校を卒業して、軍楽隊に入り、以後、各地の軍楽隊長を歴任。作曲活動を行いつつ、生涯の大半を軍隊生活で過ごしました。生年は1870年ころ、没年は1941年です。彼の作品は、管弦楽、吹奏楽、ピアノをはじめ広範囲にわたり、数も多いが、プレクトラム音楽に与えた功績はそのいずれよりも意義深く、優れたものでした。そして、ミラノのマンダリン音楽雑誌「イル・プレットロ」の協力者でした。

本曲は、1909年同誌の第2回作曲コンクールに応募、第2位(1位はA.アマディの「海の組曲」)に入賞した作品です。

彼は吹奏楽の作曲家であり、マンダリン合奏譜も多く残しました。作品の相互への編曲も多く存在します。本曲も吹奏楽版が作られています。本日の演奏は、中野二郎氏がマンダリン合奏版に吹奏楽版との変更点を反映させて整曲した補作版です。

指揮者



國土潤一

1956年東京に生まれる。1979年東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。1982年同大学大学院音楽研究科修士課程（独唱テノール専攻）修了。その後、旧西ドイツ国立デトモルト音楽院（旧北西ドイツ音楽アカデミー）に留学。1987年に帰国した後は、ドイツ歌曲を中心とした演奏活動や、『レコード芸術』『音楽の友』誌を中心とした音楽評論、後進の指導、合唱指揮を始め、講演、講習、コンサート・ナビゲーション等も行っている。声楽をテオ・リンデンバウム、リヒャルト・ホルム、伊藤亘行、川村英司、山路芳久、松村健太郎、ドイツ語舞台発音法をハンス・クルマン、ピアノを中野俊也、合唱指導法を田中信昭、和声法を矢代秋雄、浦田健次郎の各氏に師事。東京学芸大学、武蔵野美術大学、文化学園大学、放送大学講師。三菱UFJ信託芸術文化財団理事。出光音楽賞推薦委員。文化庁関係では、新進芸術家海外留学審査員・文化芸術による子供の育成事業委員・芸術撰奨文部科学大臣賞推薦委員を折々務める。海上自衛隊東京音楽隊講師。合唱指揮の分野では、クルト・マズア、池辺晋一郎氏の副指揮者を務め高い評価を得た。平成27年度 下総院一賞を受賞。（2019年5月現在）

